

『信仰が問われるとき』 ヨハネ18:15-18,25-27

18:15 シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司の中庭にはいった。

18:16 しかし、ペテロは外で戸口に立っていた。すると大祭司の知り合いであるその弟子が、外に出て行って門番の女に話し、ペテロを内に入れてやった。

18:17 すると、この門番の女がペテロに言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」。ペテロは「いや、そうではない」と答えた。

18:18 僕や下役どもは、寒い時であったので、炭火をおこし、そこに立ってあたっていた。ペテロもまた彼らに交じり、立ってあたっていた。

18:25 シモン・ペテロは、立って火にあたっていた。すると人々が彼に言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではないか」。彼はそれをうち消して、「いや、そうではない」と言った。

18:26 大祭司の僕のひとりで、ペテロに耳を切りおとされた人の親族の者が言った、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、わたしは見たではないか」。

18:27 ペテロはまたそれを打ち消した。するとすぐに、鶏が鳴いた。

●序論

特にクリスチャンのわたしたちが、「信仰が問われる」というのは、どんな状況をイメージされるでしょうか？

今、少しだけ目を留めておきたいのですが、迫害の中、牢獄に投獄されたパウロは、若い伝道者テモテへの手紙の中でこんな風には書き送っています。

2テモテ1:8 だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすることや、わたしが主の囚人であることを、決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ、神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい。

今日、わたしたちはイエスさまの弟子の一人が経験し、また私たちもまた経験するかもしれない「信仰が問われるとき」の物語を見えています。

ペテロが経験した問いかけとつまずき、そこに自分を投影して、「でも自分は大丈夫！」という人もいれば、多くは「自分もダメだ」と思う人もいることと思います。

今日、結論から申し上げます。

このヨハネの福音書は、ペテロの、そしてわたしたちの、出来不出来や、強さ弱さから一旦目を離して、イエスさまの恵みの大きさがすべてを包んでいることに目を向けるように促しているということです。

わたしに守りがある、ここで助けがつつんでくださっているのだと。

先ほどのテモテへのパウロの言葉には、その前があるのです。

2テモテ1:6-7 こういうわけで、あなたに注意したい。わたしの按手によって内にいただいた神の賜物を、再び燃えさせたせなさい。というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と憤みとの霊なのである。

そして、先ほどの8節「だから、あなたは…」と続いているのです。

聖霊の力と賜物が与えられているのだから…と、神の恵みに立つようにと言われていきます。

●本論

I. たしかに、否認してしまった

中庭に入ることができた、イエスさまの近くまで来た…そんなペテロです。

18:17 すると、この門番の女がペテロに言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」。ペテロは「いや、そうではない」と答えた。

一度目、二度目と問いかけられ、否認したペテロ。そして3度目、大祭司の僕のひとりで、ペテロに耳を切りおとされた人の親族の者が言った、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、わたしは見たではないか」。(：26)

と言われた時、彼ははっきりとイエスさまを否認し、そして鶏が泣きました。

なぜ、わたしがこんな風な解説を試みるかというと、彼が「いや、そうではない」という風に否認するのは、その状況によらず、彼の中の恐れが先だったからだと考えるからです。だから、

13:38 「…よくよくあなたに言っておく。鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう」。

というイエスさまの言葉の通りになってしまったのです。

このペテロのありさまは、決してわたしたちから遠いものではありません。

ペテロが経験した不意打ちのような問いかけ、とその応答もまた、彼の弱さをハッキリ思い知らせるのに十分であったと思います。

わたしたちの人生で、そういう経験をするのがあった時、今日の個所を思い起こしていただきたいのです。それは何か…というと、

II. しかし、そこには恵みがあった

このヨハネの福音書後半、立ち帰った御言葉をここでも改めて一緒に観ておきましょう。

13:1 …イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

だから、わたしたちにはわかります。このペテロの失敗の物語の背後には、イエスの揺るぎない愛と、とりなしの祈りが働いていたのだと。

ヨハネの福音書17章で、イエスはご自身の受難を前に、弟子たちのために、そして信じるすべての人のために祈られました。その祈りの中心には、弟子たちがこの

世の悪から守られるように、という願いです。

17:15 わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。

この祈りは、私たちが罪を犯さないようにという願いだけでなく、たとえ罪を犯し、失敗したとしても、サタンの手完全に渡されず、信仰が壊滅してしまうことから守られる、というより深い理解と願いが込められています。

ルカの福音書のイエスがペテロに直接言われた言葉も見ておきましょう。

ルカ22:31-32 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。

しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

この言葉は、イエスがペテロの失敗を予知しておられただけでなく、その失敗が彼の信仰を完全に打ち砕くことがないように、すでに祈っておられたという真実を教えてください。

ペテロはイエスを否認しましたが、それは彼の信仰の終わりではありませんでした。むしろ、この出来事を通して、彼は自身の弱さに気づいた。そしてイエスの恵みと憐れみの深さを、この後、身をもって体験することになるからなのです。

Ⅲ. だから、失敗は終わりではない

ヨハネは、このペテロの否認の物語を、単なる失敗の記録として記しているのではありません。その背後には、回復への希望が織り込まれています。

その一端が、「炭火」という言葉で、ペテロの否認の場面の状況を描写し、それが復活後の21章でも、再び「炭火」のそばでペテロとイエスが対峙する場面へとつながります。

そこでイエスさまは、三度にわたってペテロに尋ねます。「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛するか」。この三度の問いかけは、ペテロの三度の否認と明確に対応しています。そしてペテロは、もはや自分の力ではなく、心からの真実を語ります。

「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。(21:17)

そしてイエスは言われます。「わたしの羊を飼いなさい。」と。

イエスさまのとりなしの祈り、恵みに覆われた、ひとりの人の回復の物語です。わたしは関係ないかな…、とか。大丈夫だろう…と思っているかもしれませんが、そんなわたしたちをよくご存じのイエスさまは、その後計画の中で、今この物語を、わたしたちに聞かせてくださっているのです。

イエスが私たちのために祈ってくださっていること、そしてイエスの恵みと憐れみが、私たちの失敗よりもはるかに大きいことを、実感できる時がやってきます。

●おわりに)

ほかの福音書すべてに記され、ヨハネではあえて記されていないこと。

それは、ペテロがこの直後、「激しく泣いた」という情景です。

その代わりに、このペテロもそして弟子たちも、あのとりなしの祈りの中に守られていることを、先ほどの21章の記事への伏線として描き切っているということです。

つまりヨハネにとって、ペテロの涙は重要ではなく、その失敗の中にもすでにイエスのとりなしの祈りがある。かれらの信仰は、主によって守られているという視点を伝えたいのです。ここに恵みの世界が既にあるということです。

ですから、わたしたちは覚え事ができます。

第一に、「自分の弱さを認めること」ができるということです。

ペテロのように思わぬところでつまずくことがあります。そんなすべてをイエスさまはご存じです。

第二に、「イエスさまのとりなしに支えられていることを覚える」ことです。

私たちは一人で信仰を守っているではありません。イエスさまが天の御座でとりなしていただきます(ローマ8:34)。失敗しても、そこで終わりではなく、回復の道が必ず備えられています。

第三に、「失敗の中にも恵みがある」ということです。ペテロの否認も、やがて彼を真の信仰者として立ち上がらせるきっかけとなりました。

私たちの失敗も、神さまの手の中であって、必ず益と変えられていきます。

そして今、わたしたちに、イエスさまは助け主を送ってくださっています。この方がわたしたちの内にあり、また支えて下さいます。

イエスさまはこうも約束してくださいました。

わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。(14:16)

だからこういうことができます。

弱いわたしたちですが、そんなわたしたちは、全方位、イエス様からいただく恵みに囲まれて守られているのです！